



世田谷文学館友の会

会報 第55号

令和元年5月29日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南島山1-10-10
TEL 03-5374-9111
FAX 03-5374-9120
ホームページ
<http://setabuntomo.net/>

二〇一九年度 総会記念講演

平尾隆弘氏

「芥川賞・直木賞打ち明け話」

軽妙な語り口で内容多岐に亘った二時間近いお話を、ここに再現はできません。多くのトピックの中からいくつかを選んだ、その要旨をお伝えする他ないことを、どうかご了承下さい。

(文責 友の会会員・竹内修司)

・私は若い社員だった一九七四年から七七年まで、芥川・直木賞の担当部署・日本文学振興会に属し、九七年から九九年まで文藝春秋編集長として芥川賞選考の司会役を務め、二〇〇九年から一四年までは社長として陪席していました。随分長く選考の現場に居合わせたことになりました。受賞者が決まり、ご本人にその旨お知らせするのは振興会。選に漏れた方へは、割り振られた編集者から連絡するのが通例です。ですから振興会から電話がくれば、あ、受賞したな、ということになる。当時、上司にこう言われました。「賞というのは、くれてやるもんじゃない、差し上げるものなのだから、お知らせするとき偉そうにしちゃいけないよ。『お受け頂きますか?』と、はじめにちゃんと訊きなさい」。初めてお知らせ役になったのは、七四年(直木賞第七十一回『鬼の詩』の藤本義一さんでしたが、「日本文学振興会でございます。おめでとうございます」



関連に話される平尾隆弘氏

2019年4月12日

於・文学サロン

撮影・若宮利夫氏

います。ついついはいつご来社いただけますか?」と続けてしまつて、最初の決めセリフを忘れていた。途中ではつと気がついて「お受け頂きますか?」「エ、エーッ。受けるにきまつてるやないか」……。後に藤本さんは「いきなり変なこと聞かれて、いりませんゆうたろうかと思つた」と言つておられましたね。

・芥川賞(以下、芥)と直木賞(以下、直)はどう違うのか、とよく訊かれます。賞のHPには、芥はその期間中の雑誌、同人誌に発表された新人作家による純文学の中編・短編。直は新進・中堅作家によるエンターテインメント長編、短編集(単行本)が対象と書かれています。ただ松本清張さんのように直から芥候補に回されて受賞した例、直選考委員になられた田辺聖子さんが芥、芥選考委員である山田詠美さんは直を受賞された例もあり、純文学とエンタメの定義は難しい。私自身が強く感じるのは、芥は作品に、直は作家に与えられるということです。芥は作品一発勝負、直はプロとしてやっていけるかどうか、にウエイトがかかっている。浅田次郎さんは『蒼

穹の昴』が直の候補になったとき、ゼツタイこれは!と思われたのに落選、次々回に短編集『鉄道員(ぼっばや)』で獲つたのは「プロとしての細部の描写」を選考委員の方々が確認したかったのだでしょう。同様に宮部みゆきさんの『理由』での直の受賞は、大傑作『火車』の数年後でした。直は経験と実績とが必要、芥のほうは一作勝負ですから、二十代の若い人も受賞でき、話題になるケースが多いわけです。

痛感するのは、二つの賞を同時に作つた菊池寛は天才だったということ。普通なら文学賞は一つで、二つは作らない。売れない純文学作家に絶望した自身が大流行作家になった、その経験を生かしたのです。そして芥川賞作品を、自社に文芸雑誌があるのに『文藝春秋』に掲載した。『文学の社会化』、先見の明です。初めは「誰も話題にしてくれない」と愚痴っていたけれど、やがて社会的に認知され、一九五五年(第三十四回)の石原慎太郎『太陽の季節』で決定的になりました。史上初の学生作家、しかもヨットや家用車に乗つたり、派手に飲み歩いたりのリッチな主人公のカッコよさ。弟の裕次郎の映画デビュー……。ずっと後に伺つたけど、井上ひさしさんも学生時代、流行の『慎太郎刈り』をやつていたので。あまり似合わなかったと思うけど(笑)。慎太郎さんと五木寛之さんは、実は同年同月同日生まれなんです。で、『文藝春秋』編集長時代、石原さんが『法華経に生きる』

を、五木さんが『他力』をお書きになったのをきつかけに対談していただいた。五木さんが開口一番「石原さん、あなたがヨットや車で遊んでいた時、早稲田の学生だった俺は、金がなくて血売ってたんだよね」と挑発気味。石原さんは案外ナイーブな人で「あ、そうなんだ、苦労したんだねえ」と反応してお二人意気投合、ということもありました。

・芥川・直木賞選考委員はそれぞれ九人、社内委員が選んだ候補作を一月ほど前にお届けして、選考日当日「先生、いかがですか？」○は1点、△は0.5点、×は0点として集計し、1・5と2・0点の作は「落してよろしいですか？」で整理し、3・5と4・0点ほどで残った三作ほどについて一作ずつ議論を重ねた上、二回目の採点で5と4・5点以上得た作が、司会者の「受賞よろしいですか？」で異議がなければ決まります。

長く選考委員を務めた永井龍男さんには忘れられないエピソードがあります。一九七六年の第七十五回芥では、村上龍さんの『限りなく透明に近いブルー』が圧倒的支持を得て受賞したが、瀧井孝作さんと永井さんは反対。次々七十七回では三田誠広『僕って何』と池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』が共に候補作に挙がっていた。永井さんは三田作品には賛成、池田作については「これは認めることができない。僕の考える小説ではない!」「絶対反対する」と頑張られた。表決ではお一人だけが×。司会の半藤一利さんの「永井先生、賛成多数になっておりますが受賞でよろしいでしょうか？」に、「わしゃ討死だ」の一言でした。受賞作が決まったので、選考会から宴会に切り替わります。仲居さんが「ハイ永井先生」と盃をお渡しすると、おちよこを逆さにし、「討死したものに酒は飲めない。お先

に失礼」。翌日振興会に電話がありまして、「委員を辞任します」――。文士の矜持を感じました。

・私の学生に、『文藝春秋』三月号は芥川賞の二作を同時掲載、選評まで読める。得だから買ったか」と訊くと「いや、雑誌なんか買わない、余計なものが入っている。自分の欲しい情報だけでいい」。新聞も雑誌も売れない理由がよく分かります。ネットが普及し始めた頃、情報が質量ともにアップし、誰もが簡単に素早くアクセスできる。社会の知的水準は上昇してゆくと考えたものです。しかし今、全然別なことが起こっている。情報が氾濫し、ついてゆくことは至難の業。脱落しないために、若い人ほど情報を排除し限定していきます。世界より自分。興味ある情報に集中しないとやっていけないのです。二作の芥川賞受賞作には「世界を動かすなんて、頭のいい人に任せればいい」とか「世の中には関心ない」といった言葉が記されている。文学は時代の鏡です。お薦めしたい最近の受賞作は、村田沙耶香『コンビニ人間』。言ってみれば未来のAI人間が二十一世紀に降りてくればこうなる、という要素がここに……という、突き抜けた作品だと思えます。

(その後も会場からの質問に答え、小説を読むということ、村上春樹はなぜ受賞しなかったのか、“垂直に飛”ばないと、十年間作家であることは難しい……など興味深い話がありました)――残念ながら割愛



二〇一九年度友の会総会抄録

二〇一九年度世田谷文学館友の会総会は四月十二日(金)午後一時から文学館一階文学サロンで開催された。冒頭、友の会平出泧会長より、昨年度は友の会発足二十年に当たり全会員及び「三館友の会交流会」において記念品(クリアホルダー)を配布、好評であったこと、会員数は減少方向にあるものの、イベント参加者数は延べ約八百名と増加しており、会員のご協力に感謝する旨の挨拶があった。

続いて世田谷文学館菅野昭正館長から、平成最後の友の会総会であり、将来に亘る事業の盛り上がりが期待されるとのご支援と、本年度の文学館年間企画展のご紹介を戴いた。世田谷文学館花房千里新副館長より新任のご挨拶もあった。

この後、幾田充代企画委員を議長に指名し議事へ。

一、二〇一八年度活動報告ならびに収支報告

柴田副会長の報告後、鈴木廣義会計監事から適正との監査報告あり。本議案は拍手で承認。

二、役員改選

友の会役員は一期二年の任期を終了し改選年度となつたため、幾田議長から改選案が提案され、次のとおり承認された。会長・平出泧氏(再任)、

副会長・柴田光滋氏(再任)、副会長・堀伸雄氏(新任)、会計監事・若宮利夫氏(再任)、会計監事・神田康氏(新任)。

三、二〇一九年度活動計画案並びに収支予算案

柴田副会長の説明に対し拍手で承認された。

四、その他 議題に挙げる事項なし。

総会終了は一時四十分。総会出席者一〇二名。

(議決資料は会報に同封)

「世田谷と僕」

池辺 晋一郎

僕の本籍は世田谷区北沢だ。生粋の世田谷っ子だ。しかし、出身は茨城県水戸市と公称している。その辺の事情から話を始めよう。

僕は戦争中の生まれだ。まだ新婚といつていい両親の住まいは、北沢だった。だが、父は出征。母は自分の郷里に疎開し、そこで僕を産んだ。それが水戸なのである。やがて終戦。父は帰還したものの結核療養所に入り、東京へ戻ることがしばらく叶わなかった。僕も病弱で、小学校就学が一年遅れる。まもなく父は東京の仕事に復帰したが、北沢の親（すなわち僕の祖父母）の家と水戸の往復。僕の小学校卒業を待つて家族で東京へ。前記祖父母の家に同居することになった。

僕の世田谷住まいは、こうして始まったわけ。転校することなく、区立北沢中学へ入学。私立に進む者は別として、区内の北沢と東大原小学校の全員、守山と池ノ上小学校の半数が集まる。その中で、僕はまさしく、外様だ。なのに、入学式の日に早くも幾人かの親しい友ができた。たがいの家が近かったせいもあり、この仲間とは、毎日遊び呆けた。振り返って驚くのは、中学生の行動半径の広さ。北沢を起点に北は笹塚、南は駒場公園から三宿近辺、東は大山公園あたりまで走り回った。西は、根津山（現・羽根木公園）だ。この漢字が正しいかどうか、知らない。ネジヤマと呼んでいただけ。考えてみれば、このうちには渋谷区や目黒区が含まれている。世田谷区の東北端に位置するがゆえに、活動領域は自然

に区の境界を越える。その意識すら、ない。

そういえば、前記「根津山」で、ある時草むらにやや大きめの虫かご状のものが捨てられているのを見つけた。中で、ハツカネズミが一匹、元気に動き回っている。僕はそいつを持ち帰り、家でしばらく飼った。動物が好きだったのである。僕の部屋には、ジュウシマツ、カナリアなども同居していた。餌のアワやヒエなどは、近所の小母さんの所で入手する。今思えばそこは店ではなく、まさにブラック。そんなたまたまいを不思議にも感じない、戦後十数年の時代だった。

つまり、自然がふんだんに残っていた水戸で過ごした小学生時代と、たいして変わらなかったわけだ。かつて北沢では川でザリガニを獲ったりしたと父は言っていたが、僕の中学生時代は、まだその延長線上だったと思う。

そんな中で僕は高校へ進み、毎日東北沢から新宿まで、小田急線を通った。あのころの朝のラッシュは、ものすごかった。新宿に着くと人混みにカバンがひっかかって下車できず、ついに手を離さざるを得ず、人がまばらになってから散乱した道具をひとり拾わざるを得ず……というようなことまであった。その小田急も、今や地下で複雑線化。ラッシュも穏やかになり、もろもろ隔世の感がある。そういえば、先ごろ、近隣の学校の統合で生まれた「下北沢小学校」の校歌を作曲した。地元在住ゆえ依頼されたのである。世田谷色の濃い住人になったな、と実感することしきりだ。

（作曲家）

執筆者紹介 交響曲十曲、オペラ「鹿鳴館」「高野聖」他。合唱曲、室内楽多数。著書多数。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館

【「ドナルド・キーン コレクションコーナー」】

日本人となったキーン・ドナルド（雅号・鬼怒鳴門）さんはここに居る。「赤レンガ図書館」と呼んで地元のキーンさんも気に入っていた東京・北区立中央図書館の一階角部屋に「ドナルド・キーン コレクションコーナー」はある。二月二十四日、日曜の朝、テロップに九十六歳で逝去と速報が流れ、思わず「新元号を聞かずに」と呟いた。翌第四月曜の開館日ここで偲んだ。

既に初老の男性が一人、閲覧席に座ってキーンさんの最近の著書『正岡子規』を読んでおられた。「寄贈した本には私の書き込みがありますが、図書館の本に書き込みしてはいけませんよ」とユーモアあふれるキーンさんのメッセージのとおり、日本の参考文献などの多くに小さな英語の書き込みを見つけることもできる。寄贈図書は和書・洋書計七八八冊に及ぶ。

英語版『日本文学選集』の扉には「to Mother with love, Donald」とお母さんに宛てた直筆のサインがある。三代前半、初めて京都大学大学院に留学した時に書き上げたキーンさんの熱い思いが伝わってくる。この本のお蔭で日本文学を広く海外に紹介するきっかけができ、今では、世界各地で日本文学の教育、研究、翻訳に従事している人の必須本になっている。

「これが最後と思ったことはない」と言っていたというキーンさんは二〇一一年から「ドナルド・キーン著作集」（全十五巻）の刊行を続けてきた。奇しくも平成が終りを告げようとしていた今春、別巻を出して完結の時、誰よりも日本人であったその人は、今度はここから「怒鳴り」、励まし続けてくれる。

住所 東京都北区十条台一二・五 北区立中央図書館
電話 〇三―五九九三―一二五
入館料 無料
休館日 第一・三・五月曜日

（友の会会員 幾田充代）

新春散歩

「向島ゆかりの文人たちを訪ねる」に参加して

中山 美智子

向島への新春散歩当日（平成三十一年一月二三日）、曳舟駅には地元の墨田区観光ガイドの方々が迎えてくださり、総勢四十一名にて出発。

スカイツリーを眺めつつまず幸田露伴旧居跡に向います。途中墨田川高校歌碑（露伴作詞）に寄る。向った蝸牛庵は今、児童公園となっていました。碑文には露伴の作品『運命』の冒頭部分が書かれてあり、会員の堀伸雄氏がその場で朗読してくださいました。

次に隅田川沿いの鳩の街に向います。そこは普通の商店街とも住宅街とも異なる独特の雰囲気がついており、狭い道の両側に二階建ての長屋が遠くまで連なっていました。戦前、戦後にかけそこは花街として、約三百軒もあり賑わっていたとのこと。その商店街の中、吉川英治旧居跡があり、案内板には花街に住む女性と暮らしたことが書かれています。

次に訪れたのは正岡子規が三カ月程住んでいたという長命寺そばの桜餅店。近くに言問団子店もありました。また、森鷗外が十歳の時、津和野藩典医の父と上京したという曳舟川近くの旧居跡を訪れました。鷗外の「鷗」は「かもめ」の意味があり、曳舟居士のペンネームと同じ向島にちなんでつけたとのこと。

墨田公園側には堀辰雄、佐多稲子、二人の旧居跡があり『驢馬（ろば）』の同人仲間だったことが解りました。

昼食は下町割烹上総屋。その後、すみだ郷土文化資料館を見学しました。

資料館では、昭和二十年三月十日の東京大空襲で墨田区の七割を焼失、その体験を区民が描いた絵三百点近くを順次展示しています。当日、B29は約三百機飛来、焼夷弾一六六五トン投下、わずか二時間半で死者十万人以上となり東京の空襲は八月十五日までに合計百回にも及びました。

また後日いただいた資料の中に昭和十六年の向島の地図があり改めてよく見てみました。向島は隅田川、荒川放水路、十間川、中川の四つの川の中に町があり、まさに地名の通り島の様な所だったのですね。さらに曳舟川、中井堀が町中を流れ東武鉄道、京成電鉄が走っています。その中に国民学校十五校、花王、資生堂等の石鹸工場、明治製菓、ビール、酒造会社、紡績、革工場、二ヶ所の私娼街、大学艇庫等があります。

佐多稲子の作品『煙草工女』には工場託児所に乳児を預け休み時間に乳を与え、オムツを洗う女工の姿、工場の排液での川の汚れなどが描かれています。当時は中小の町工場が沢山あり向島区、本所区合わせて四十八万の人口密集地だったことも知りました。

今回の向島訪問を通し明治、大正、昭和の時代を墨田区で暮し、生きてきた作家達、人々を想像し身近に感じ学ぶ、その入口に立つことが出来ました。敗戦から七十四年目、復興した墨田区は現在マンションも増え平成三十年には人口二十七万となりました。春の隅田川、向島をもう一度ゆっくり訪れてみたいと思います。

（友の会会員）



わたしの一冊
『松本清張の「遺言」
—『神々の乱心』を
読み解く』

原 武史 著
文春新書 刊
樹所 秀子

深いところでもある。

その作品を、原武史氏がこの小説を深く読み解き、読者に理解しやすくまとめ上げたのが標記の本である。

松本清張の徹底した調べ上げの作業により、様々な歴史的事実が浮かび上がっていく。

歴史・地理・鉄道などを上手く駆使した文章の流れにより、最後のページまで飽きることなく読み終えることが出来る。

原武史氏は日本政治思想史が専門であるだけに、歴史的事実に沿って『神々の乱心』を読み解いている。

また、聖域ともいうべき皇室のエリアにも可能な限り踏み込んでいる。目に見えない薄いベールが、一枚一枚剥がされていくかのような緊張感もある。

『神々の乱心』は長編小説なので登場人物が多いが、原武史氏はこの本の巻末に、関連年表と共にそれも掲載しており、とても参考になった。

二〇一九年五月には元号が改められたが、それを踏まえて、『神々の乱心』を読み解く作品として、実に良い機会なのではないかと痛感した。

（友の会会員）

講座

「文学の力で祖国中国の改革を担った鲁迅」

齊藤 明

二〇一八年十月四日、早稲田大学名誉教授岸陽子先生の世田谷文学館での講演テーマは「中国を識るために鲁迅を読もう！」であった。先生は近現代中国の知識人と民衆に多大な影響を与えた鲁迅の作品と思想や活動などについてお話をしてくださった。

一三〇〇年に渡って中国の官僚体制を支えてきた科挙制度は一九〇五年に廃止されるが、その功罪の中で鲁迅は特に知識階級の民衆からの乖離を問題視し「知識人が変わらなければ社会は変えられない」として、実社会の現実に向き合おうとしない古典学識主義知識人を、作品を通して痛烈に批判した。現代でも学識人と庶民との思考落差は大きく、岸先生は香港や北京在住中の驚きの体験実例を紹介された。さらに儒教思想による家父長制や男尊女卑社会の実態を暴いた作品などに触れた後、弟の周作人や鲁迅が生涯尊敬し続けた藤野先生のこと、鲁迅と生活を共にし活動を助けた新しい時代の女性許広平のこと、また中国文学の第一人者で鲁迅研究でも有名な恩師故竹内好氏との思い出、農民出身で中国最初のノーベル文学賞受賞者莫言氏とのエピソードなども聞かせてくださった。

私は受講後、激動の中国近代史を調べ、鲁迅作品を改めて読み直した。一八四〇年のアヘン戦争を契機とする列強の半植民地化侵略は、幾多の不平等条約闘争や内乱を起こす。武昌起義辛亥革命によって一九一二年遂に清王朝が滅び、アジア初の共和制国

家中華民国が誕生するが、孫文の後を継いだ袁世凱の専横によって軍閥割拠の混乱と民衆の貧苦が続く。鲁迅は、医者となって人の肉体を治すより精神を治すことが急務と考え、知識人の民衆一体化と儒教思想からの民衆解放を図るべく、口語文で『狂人日記』『阿Q正伝』や多くの雑文を発表し続けるが、社会主義新国家中華人民共和国の成立を見ずに一九三六年五十五歳で没する。

私は岸先生の講義により、文学者鲁迅の真の偉大さを理解した。

新元号「令和」発表前後に思うこと

糸井 久



新元号「令和」の発表以後、讃辞が溢れ、国中お祝いムードでお祭り騒ぎになっているのだが、私にはどうも「令」に好感が持てないでいる。

幕末に「令」が新元号選定に関わった事がある。孝明天皇文久四年（一八六四）に朝廷で改元を考え、元号名に「令徳」「元治」を選び徳川幕府に内示した。ところが老中との間で第一候補「令徳」は「朝廷が徳川に命令する」意があると不満で内諾を渋ったのである。当時元号決定権は朝廷にあったので幕府側では表だって反対を表明できず、松平慶永が関白に仲介を頼みようやく第二候補「元治」を選定することとなったという史実である。「令」には「公的な組織が処分命令を伝える」意があると老中が解していた

のだ。私も幼時の記憶に「召集令状」があるから老中と同じ意に理解している。

「令和」は万葉集巻五に大伴旅人の私邸で開かれた「梅花の宴」の三十二首の和歌に添えられた漢文の序中の「初春令月、氣淑風和」（今は正月のめでたい月、風は心よくやわらかに吹いている）から好字として「美しい。良い評判」の意でとられている。

「明治」が元号となった後、逆さに読み「治まるめい」とからかわれた事があり、「令^レ和^一」として（お上が）美しいと思う平和を（国民に）命令する」と読むのは如何だろうか。

万葉集より採用のお陰で万葉関係の本の売れ行きが好調だと聞く。文科省が大学の文系学部とくに文学部の縮小廃止を率先提唱していて、国文学研究は絶滅危惧種の学となりつつある時に有難いことである。だが元号発表後俄に日本の「国書」より選定したと政府が強調するのは不思議でならない。何か隠れた企みがあるかと私は勘繰っている。

元号は時代の理念を表わす。その実体化は時代を生きる人々の意志と行動によっている。この連休中国内にはオリンピック開催間近の熱気が満ちてきたし、さらに改元を祝って全国的なお祭り騒ぎが加わった。その狭間に二〇二〇年に改憲実現の決意を語る人もいる。私が幕末の「ええじゃないか」騒動の再来を思うのは、杞憂だろうか。

二〇一九・五・五記

（友の会会員）



講座

「啄木短歌の魅力」を拝聴して

北條 忠政

講師の大家精一先生は、萬葉集と共に石川啄木がご専門。特に「国際啄木学会」副会長を務められる啄木研究の泰斗でいらっしゃる。啄木は詩、小説、評論等でも知られているが、本講義は短歌が主題。啄木短歌と言えば、あの「東海の小島の磯の白砂に……」や「たわむれに母を背負いてそのあまり……」など、直ぐにも口をついて出て来る歌が多い。そして共感できる歌が多いのも事実だが、一筋縄ではないかない作品も多いというのが啄木の特色だという前提で講義が始まる。

前半は、啄木の第一歌集『一握の砂』を主体とした代表作十首と、各テーマに関連した二十首を鑑賞されたが、期せずしてそれは啄木の少年期から不幸な流浪の旅路に重なる。知っている歌でも作歌の背景が分かれるとその理解は格段に深まることを改めて知らされる。

後半は、先生の研究成果の真骨頂と言うべく、啄木歌集の独特の編集に新たな解明の切り込みが披露された。例えば、一頁に三行詩二首が原則なのに、「節」の最終の歌は右ページの右側に一首だけという手法が採られているが、それを一貫するために一首補填したり、更に思い切った「推敲」というよりむしろ改作までしていることを立証される。

◇ 先生は冒頭、「私の顔は十六歳の啄木の半世紀後の顔で、啄木そっくりさんと言われるのです」と座を和ませてくださった。また、資料には随所にクイズ

「三択」を混ぜて考えさせたり、三行詩を先生について唱和させるなどして、啄木の世界に自然に溶け込ませる雰囲気づくりをされた。貴重な文献、写真集、ご自身のご著書等の披露もしていただいた。

惜しむらくは、時間が休憩を含めて二時間は短か過ぎた。代表作の鑑賞自体、先生も時間が無いからとピッチを上げておられた。ご事情が許せば先生の今回の「続編」、それも関連を少し広げて後二、三回お願いしたいところだ。最後に緻密な資料をいただいたことに感謝申し上げたい。(友の会会員)

(平成三十一年二月一日 世田谷文学館にて開催)

エッセー「わたしの二冊」の原稿募集中!

- ・タイトルに本の題名(著者名・出版社名・出版年も)明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記・字数は六〇〇字以内(厳守)
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回



せたがや文化財団三館友の会交流会 開催

平成三十年度「第十五回三館友の会交流会」は十一月十三日、世田谷文学館で開催された。世田谷パブリックシアター、世田谷美術館、世田谷文学館の三館友の会会員を中心に六十余名の集いとなった。第一部では、文学館友の会平出洗会長、美術館酒井忠康館長の挨拶の後、各館友の会の活動を報告。次に、文学館「筒井康隆展」を観覧、アトラクションへ。北原白秋作詞・山田耕筰作曲によるインド民話「ポストマニ(芥子粒夫人)」をソプラノ歌手が歌い、その壮大なバラードに一同感動した。ティーパーティーは、世田谷区岡田篤副区長、せたがや文化財団永井多恵子理事長を迎えて始まった。冒頭に平出会長より、文学館友の会二十周年を記念して菅野昭正文学館館長の協力によるフランス文人たちの箴言をデザインしたクリアホルダー贈呈の案内、パブリックシアター友の会朝生公章会長の乾杯挨拶、来賓紹介・挨拶の後、他館との情報交換や有意義な交流を行った。来年度当番年の美術館友の会より庄司マサエ副代表が挨拶、中締めとなった。



右から文学館友の会平出洗会長、アトラクション出演のソプラノ・和泉純子さん、ピアノ・高瀬奈美さん、文学館友の会柴田光滋副会長
(撮影・幾田充代氏)

父の思い出とともに ～茨城県より～

山中 裕子

二月のある晩、文学館友の会の森さんから原稿依頼の電話がありました。突然のことでしたのでお断わりしようと思いましたが、その時、父と友の会の案内役だった菊地宗孝さんの顔がパツと浮かんだのです。

父（山中秀夫）は日本橋生まれの世田谷育ち、就職して東京を離れましたが、生涯東京、特に世田谷に愛着をもっていました。ですから世田谷文学館ができたことを知り喜んで一緒に入会しました。父の書齋には、友の会の講座や文学散歩のレジメがいくつも残っています。友の会からの案内が届くと、さつそく往復はがきに申し込みをし、当日は、帽子をかぶりショルダーバッグを肩に嬉しそうに出かけて行った姿が忘れられません。

「漱石を読む」の講座は五回あり、そのうちの二回は野外講座でした。雑司ヶ谷霊園や護国寺、ニコライ堂、山の上ホテル周辺を父と楽しく参加したことが思い出されます。いつも先頭に立って説明してくださったのは、友の会の会員の菊地宗孝さんです。その土地や建物などについてとても詳しく知っており、お元気な菊地さんに、「おいしくつくらいかな、戦争には行ったのだろうか」と言いながら父はとても感心していました。

また、「世田谷を歩く」の文学散歩では、実家のあった代田の近くに萩原朔太郎の洋館があったことや、北杜夫の『榎家の人々』に出てくる場所などを父とおしゃべりしながら一緒に歩いたことを昨日のこと

のように思い出します。世田谷から地方の文学館へと父が案内役となり、茨城県の古河市にある「古河文学館」や「永井路子旧宅」等を見学、そしてはつせの銘菓「しらたま」を紹介し皆さんに好評だったと喜んでいただくことも思い出されます。父が逝って七年、あのお元気で大きな声で説明してくださった菊地さんが父のすぐ後に亡くなったことを知り大変驚きました。

最近文学に縁のなかった夫も一緒に世田谷文学館に足を運び特別展を見たり、旅先で文学館を訪ねたりして楽しむようになりました。これからは、孫たちを連れてワークSHOPなどに参加して世田谷文学館との縁をつないでいこうと思っています。

（友の会会員）



せたぶん・うおっちんぐ



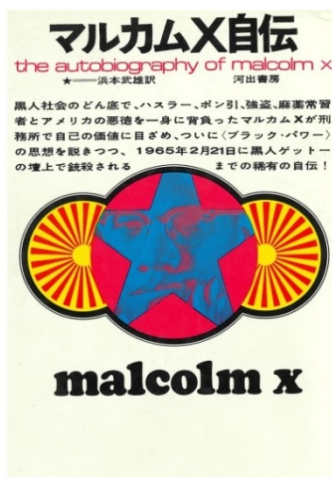
『マルカムX自伝』 浜本武雄訳 河出書房刊

鈴木 美奈子

「この本が出るときにまだ私が生きていたら奇跡だ」の予言通り暗殺された黒人解放運動家。本名はエルーハジ・マリク・エルーシャバース、徴兵検査のときだけ名告った。この自伝は著者の異常な死のショックがさめ切らないうちに出版され、さまざまな反響を巻き起こした。

説教師の父を三K団らしき黒人排撃主義者団体に

殺され、一時は黒人社会のどん底で、ポン引き、強盗、麻薬常習、白人の情婦を持つなど、マルカムは黒人社会の、いなアメリカ社会の悪徳と歪みを一身に集中したような人間だった。その彼が刑務所の中で文字を覚え、読書の中から高度の知性を獲得し、ブラック・ムスリムの最も戦闘的なリーダーから今までにない新しい理念によってアメリカ黒人の解放運動を展開しようとした矢先の非業の死であった。



被抑圧大衆のより大きな国際連帯の自覚を第一に、第二にアメリカ黒人の集団としての経済的自立の重要性、第三には、白人などあらゆる人種との交流は認めるが、他方、一切を黒人だけの力で取りしきつて白人の参加を認めない、という方針は彼自らが組織しようとした「アフリカ系アメリカ人統一機構」の綱領として彼の思想の根幹をなすもの。特に回教が、アメリカ黒人にとって非常に求められている、と言う。

一読、テーマは重いけれど、なんと言っても主人公がクールなジャズマン、生命力に溢れたブラックパワーに勇気をいただいた本であった。

（友の会会員）

～こういう催しがありました～（2018年10月～2019年4月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2018 年 10 月 4 日	講座 中国を識るために魯迅を 読もう！	岸 陽子氏	近代中国の作家・魯迅の『狂人日記』が1918年に発表されて100年の節目を迎えた。変革期の中国に身を置き、強靱な精神と冷徹な眼差しで中国社会の暗部を自身の痛みとして描き出し、やがて変革の旗手は「新しい知識人」へ。農民出身の作家として誕生した莫言は2012年ノーベル文学賞を受賞した。
11 月 13 日	公益財団法人せたがや文化 財団三館友の会交流会公演 作詞・北原白秋、作曲・山田耕 柞によるインド民話の歌 「芥子粒夫人（ポストマニ）」	ソプラノ 和泉 純子氏 ピアノ 高瀬 奈美氏	せたがや文化財団の三館である世田谷パブリックシアター、世田谷美術館、世田谷文学館の友の会交流会は15回目を迎え、今回は文学館友の会が幹事当番として公演を企画、好評であった。年に一度、世田谷区、財団理事長、各館館長他の来賓を交え、相互に支援の輪を広げる貴重な場となっている。
11 月 27 日	講座 大伴家持（生誕1300年） — 没落する名家を支えながら、 歌に生きようとした悲運の万 葉歌人—	糸井 久氏	家持は『万葉集』を編纂した歌人であるが、大伴氏は大和朝廷以来の武門の家であり、祖父・安麻呂、父・旅人と同じく律令制下の高級官吏として中納言にまで昇った。武門の名家の誇りを背負いつつ歌作に励んだ相反する内面と深い人生の機微を学んだ。
2019 年 2 月 1 日	講座 啄木短歌の魅力	大室 精一氏	冒頭いきなり啄木の顔写真を掲げられ自身と似ていませんかと問われ、皆笑った。その後もクイズに短歌唱和にと楽しく学びつつ、啄木独自の編集意識に着目した先生の研究成果に真剣に聴き入った。
4 月 12 日	総会記念講演 （文学館と共催） 芥川賞・直木賞打ち明け話	平尾 隆弘氏	元文藝春秋社長である氏は、20～30代に芥川賞・直木賞の事務方を務め、40代で『文藝春秋』編集長として芥川賞選考会の司会、社長時代は日本文学振興会理事長を務められた。芥川直木賞受賞者と作品一覧表を配布資料として印象に残る受賞作や受賞作家のエピソードなどを聴講、両賞が果たしている役割を再認識した。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2019 年 1 月 23 日	新春散歩 向島ゆかりの文人たちを訪ね る～幸田露伴、吉川英治、森鷗 外、佐多稲子…らの旧居跡など ～	墨田区観光協 会ガイドの皆 さん	1月23日大安、みぞれ予報の朝であったが、歩行中は陽がさし、めでたく新春散歩日和となった。露伴の蝸牛庵跡で朗読『運命』に心を研ぎ澄ました。「すみだ郷土文化資料館」では昭和20年の東京大空襲を体験した墨田区民の描いた絵も展示され、昨日のことのように釘付けになった。向島自体は空襲を免れ今でも文人墨客の集った街の面影が残っている。

編集後記

4月1日11時半は、東大病院で受診中だったが、ドクターから「レイワになった」「レイは令」「原典は万葉集」「ネットで令和、万葉集と検索したがヒットせず」と聞き、先ず「レイワ」という語が万葉集にあったか、との違和感を覚えた。後で原典が報道されたが、更に発音も、奈良時代

だから呉音の「リョウ」を取るべきかとも思った。然し決まった以上は国民に好感を持って貰わねばならず、「親しみを持つ」が63%で「持たない」24%を大きく上回った（5月13日・日経）のは先ずはご同慶の至り、というべきだろうか。（平出 洸）